木曾が現代に紛れ込んでしまったようです

ビクトリー

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

海をで釣りをしていたら艦娘を釣ってしまった!?

そんな唐突な出会いから始まる物語・・・ 青年は彼女と何を思い、何を感じるのか？

目次

出会い　1
同棲　9
買い物　前編　21
買い物　後編　31

出会い

出会い

「何にも釣れないな…」
今日は特に釣れない、もう結構やってんのに…。
いつもなら一匹くらい釣れてもいいはずなんだが、全く釣れない。
「なんでこんな時にアタリが来ないんだよ」
せっかくの夏休み初日から坊主で帰るわけにはいかない。
せめて一匹でも釣らなければ…。
だけど、ここは結構な穴場で来れば必ずと言っていいほど釣れてたのに、何で今日だけ釣れないんだ?
なんか沖合でなんか起こってるとかか?
そんなことを考えていると竿にアタリが来る。
「ようやくか!」
… ん?この感じ、まさか…。

「たぶんこれ、根がかりしてるな…」
やっちゃたよ…、まだ一匹も魚が釣れてないのに…。
もうゴミでも何でもいいから引き上げよう、それだけでも釣った結果は残る。
…　ゴミだけど。
カリカリ
「ずいぶんと重いな」
少しこれは重すぎないか…。
いったいこのラインの先に何が引かっかているんだ？
「コンクリの入ったドラム缶とかじゃないよな」
もしそんなんなら俺はリールを切るぞ。そんな中にナニが入ってるか不明なものを誰が引き上げるか。
まあ、そんなことは引き上げればわかることか。
ちょうどもう少しだし…。もう巻くのが面倒だから力づくで引っ張り上げるか…。
切れる可能性が大きくなるが、どうせゴミだしいいだろう。
「よっとッ！」
ざばぁ
「…　これは夢かなにかか？」

俺に対してドッキリでもやってんのか？
だとしたら相当悪質だな、オイ。
「…」
なんで俺の竿にコスプレイヤーが引かっかんだ？
おっと、そんなこと考えている場合じゃないな、この娘を早く針から外さなければ…。
…。
針は外したけどこの娘どうしよう…？
一応生きてはいるようだが…。
まず家に連れて帰ろう、このまま放置もかわいそうだし濡れた服のままじゃ風邪をひくしな。
そう思って俺はその娘を担ぐが…。
「お、重い…」
なんだこのコスプレイヤー、武装も鉄製かよっ!!
気合入りすぎだろ…。
これは車まで行くのが大変そうだ。

「ようやくたどり着けた…」
ここまで来るのが容易じゃなかった。
救いがあるとすれば、運んでいるところを誰にも見られなかったことだな。
人の少ない場所で見つかってよかった。
男がびしょびしょに濡れたコスプレ娘を背負う、なんて光景を見られた日には確実に捕まるからな。
「よっと」
俺はそのコスプレ娘を車の座席に寝かせる。
疲れた…。
座席が濡れてしまうが、しょうがないということにしよう。
だけど、あとは家に連れて帰るだけだ。
そして俺は運転席に乗りエンジンをかけ、走り出した。
「だけど、あのコスプレ娘が起きたら自宅まで送らなければならないのか…」
だとしたら相当めんどくさいな、まあ車に乗せた時点でこうなることは決まっていたしな。
だけど、このコスプレ少女の親はどんな人だろう？
この田舎でこんな恰好をした娘を、何も言わずに家の外に出す親か…。

このコスプレ娘の両親が常識人であることを祈ろう。
だけど、この娘もなんで海に落ちたんだ？
どちらにしろこの娘が起きるまで分からないか・・・。

「やっと着いた」
車を走らせること2時間、ようやく我が家に到着した。
さて、まだ車の座席で寝ているコスプレ娘を家の中に運ぶか。
「よっと」
やっぱり何回持っても重い、だがさっきと比べると距離も短いしだいぶ楽だな。
そして俺はコスプレ娘を背負ったまま家の中に入り、部屋のソファーに寝かせる。
「さてこれからどうするか」
まずこの、コスプレ娘が起きてくれないことには家の場所も聞けないしな・・・。
だけど本当にコスプレのレベルが高いよな、武装とかも重さと手触りから鉄で造られていることがわかるし、服装や顔立ちまで何から何まで完璧である。
本当に『艦隊これくしょん』の世界から出てきたみたいだな・・・。
「・・・ ここはどこだ？」
どうやらそんなことを考えているうちにコスプレ娘が起きたらしい。

　此処はどこかか、…　普通に答えるか。
「ここは俺の部屋だ」
「お前が助けてくれたのか？」
　助けたというか釣り上げただけなんだが…。
　なんか少し罪悪感が…。
「ああ、そうだ」
　良し、あとはこのコスプレ娘から家の場所を聞いて送っていけば終わりだ。
　だけど最後に名前くらいは聞いておこう。友達との話のタネになるかもしれない。
「お前の名前は？」
「俺か？俺は『木曽』だ」
　いや、俺が聞いたのはそういうことではなく本名なんだが…、
　まあ、俺の質問の仕方も悪かったな。
「本名のほうを教えてくれないか？」
「本名？木曽だが？」
　こいつマジで言っているのか？
　だとしたら結構痛い子だぞ。
　いや、ちょっと待て、そういえばこのコスプレ娘が持っていた武装どこで作ったんだ

？

あんなデカい物を鉄から作れる工場なんてここらにはない。てか、このコスプレ娘は鉄の武装を付けたまま移動していたのか？

だとしたらこのコスプレ娘が俺以上の怪力を持っていることになるが、普通の人間の女の子があの重さを耐えきれるとは思えない。

「コスプレじゃないんだな…」

出来ればありえないほどに凝ったコスプレであってくれ…。

「こすぷれ？なんだそれ？」

これは、もう…。

まだだ、まだ決まったわけじゃない……。

「少し質問に答えてもらっていいかな？」

「いいぞ」

さて、この質問で決まる…。

俺の予想が外れていることを祈ろう。

「どうしてここに居るの？」

「ああ、鎮守府の近くで謎の海域が出現してな、それで俺が一人で偵察に行ったんだ。そしたら、海　域に入って少し経ったときに光に包まれて、気を失って気づいたらここに

居た」
もしこれが嘘だというのならこの子は相当な嘘つきだな。
だけどこのこの子がそんな嘘をつくとは思えない。
・・・　これはもう決まりかな。
『木曾』、これから説明することをよく聞いてくれ、それと今から言うことはすべてが真実だ」
「なんか重い話みたいだな、いいぞ言ってみろ」
どうやら木曾も事の俺の声から重大さを感じ取ったらしい。
そして俺は木曽に全てを教えた。
本来、彼女はこの世界に存在しないと、そして存在するはずのない架空の人物だと・・・。

同棲

同棲

「信じられないって言いたいが、たぶんお前の言っていることは本当なんだろうな」
木曾はどうやら俺の言ったことを信じてくれたらしい。
逆に信じてもらえなかったらどうしようかと・・・。
「理解してくれたか」
「理解はした。だが、俺は元の世界にも出れるのか？」
「・・・　わからん」
分かって貰ったのはいいが、これからどうしよう。
木曾をもとの世界に戻してやりたいがそう簡単に帰れるとは思えない・・・。
だとしたら木曾はどうなる。この世界に木曾の居場所はない。
誰かの手助けがなければ木曾はこの世界で・・・・・・。
「木曾、泊まる場所とかはあるのか？」
まあ、あるはずないだろうな。

答えが分かり切っていて、こう言うは少しずるい気もするが・・・。
「もし、泊まる場所がないなら俺の家に泊まれ」
「いいのか?あってまだ少ししか経ってないやつを泊めてもいいのか?」
なぜに2回言った?
そんなことより困っている女の子がいたら、助けなくてはいけないのが男だろう。
「そんなことは関係ない。それに木曾が悪人には見えないしな」
艦これを知らない人から見たら、
変人に見えるかもしれないが・・・。
「いや、だが「不安なのか?」・・・　分かった。これから世話になる。」
ようやく木曾の説得に成功した。
ちょと木曾のセリフを拝借したが俺が言っても安心感があんまないな・・・。
木曾が言うとなんであんな安心感があるんだ?
さて、じゃあまず・・・。
「木曾、風呂場でシャワーを浴びてきてくれ。体がベタベタだろうから・・・」
俺はその間に『アレ』を隠そう。
「どこにあるんだ?」
そうだ、木曾はこの家をよく知らないんだ。

頭が現実に追いついてないな・・・。
「ちょっと着いてきてくれ」
そういえば木曾の武装って外せるのか？
外せないなら相当不便だが、聞いてみるか。
「木曾、その武装って外せるのか？」
「これか？これは外せるぞ」
そうか、ならよかった。
もしはずせなかったら家の外にも連れ出せないからな。
一応、武装している状態でもコスプレって言い張れば何とかなるかもしれないが、
この田舎でそんなことをすれば有名になることは目に見えている。
場合によっては、海外にいる親の元に連絡がいく可能性も捨てきれない。
そんなことを考えているうちに着いたようだ。
「シャワーの使い方はわかるな。それと服は洗濯機に入れてくれ」
「洗濯機の使い方なんて俺は知らんぞ？姉さんたちなら知っているかもしれんが・・・」
洗濯機は知っているのか。
だけど姉さんって球磨型の子たちだよな。
俺のやっている艦これでは、木曾以外みんなレベル９９にしてそのままだな・・・。

久しぶりに球磨型で演習をやってみるかな。
「洗濯機の中に入れておくだけでいいよ。後は俺でやって置くから」
だけど、木曾が風呂から上がったらいろいろ説明しなきゃな。
使い方ぐらいは教えておこう。
「じゃあ、ごゆっくり」
ゆっくりとシャワーを浴びていてくれ。
その間に俺は『アレ』を隠さなくてはいけないんだ。
「ありがとな」
不意にお礼を言われる。
「お礼なんて言う必要はない、それにこんなことでお礼をしてたら疲れるぞ」
そう言って俺は扉を閉めて部屋に急ぎ足で急ぐ。
実際、そんなことでお礼を言われちゃこっちが大変だ。
さっさと『アレ』を隠さないと・・・・。

「これが見つかったら公開処刑だな・・・」
俺はそんなのんきなことを言いながら手に持ったそれを見る。

そこには、Ｒ１８の文字が書かれたかなりきわどい表紙のうすい本が握られている。
確かこれで最後のはずだ。
これをダンボールに入れて押し入れの中にしまえば任務は完了だ。
「よっと」
俺はダンボールを持ち、それを押し入れのに突っ込む。
少し布団が邪魔だったが何とか入れることが出来た。
これで任務完了、これで木曾に木曾の薄い本を見られる。
最悪の状況はなくなった。
もし、見られたらおれ生きていけないからな。
物理的にも、精神的にも…。
「ふう、こういうのもアリだな」
「ようやく来… た…。お、お前なんて恰好してんだっ!?」
なんでコイツは裸なんだ！
そういえば服のこと考えてなかったな…。
だが、それでなんで俺の前に出てくる！
「まず、風呂場に戻れ！」
「？わかった」

多分アイツなんで風呂場に戻れって言われたか分かってないな…。
あいつが着れそうな服、探すか。
「俺、これから大丈夫なんだろうか？」
さっきの光景は、忘れないようにしよう。

木曾が裸で出てきた後、俺は大急ぎで木曾が着れそうな服を探したんだが結局は、
上はワイシャツ下はジーパンというなかなか見ない服装になってしまった。
「俺にそんな気を使わなくてもいいんだが…」
気にしなくてもいいと言われても、女の子を裸で放置するはずないだろ！
てか、そんなとこ人に見られたら確実に通報されるわ！
「人の好意はありがたく貰っておけ」
明日あたりに木曾の服を買いに行こう。
さすがに同じ服を着続けるわけにはいかないし。
しかも木曾が着ていた服が乾いたとしても、着れないからな。
目立ちすぎる。特にあのマントが。
「そういえば、まだお前の名前を聞いていない」
あれ？

俺まだ木曾に名前言っていなかったけ？

「俺は『木村宗太』だ」

ぐうぅー

どこかで腹の音が鳴る。

この部屋には俺と木曾しかいない。それで俺じゃないとすると・・・。

「すまないがなんか食べるものはないか」

・・・　さすが木曽だ、全く恥ずかしがったりしないな。

木曾の赤面少し期待してたんだが・・・。

そう言えばまだ夕食を食べていなかった。

・・・　今から作るか。

「木曾、食べれないものとかは無いよな？」

「無いぞ」

さて、何を作ろうか？

あんまり時間もないし、手早く作れるパスタでいいか。

「完成」

やっぱりパスタはいいな、手軽にできてそれでいて美味い。

さてあとは皿に盛り付けて木曾の居るところまで持っていけばいいな。
「木曾、できたぞ」
「おっ、美味そうだな」
そういえば、人のために料理を作るのっていつ振りだっけ？
確か最後に作ったのは、確か親が海外出張に行く前の日だったはずだから、もう半年ぐらい経つかな？
「「いただきます」」
そう言って木曾がパスタを食べる。
味付け大丈夫だよな・・・。
「・・・」
木曾が一口食べてフォークを止める。
まさか、口に合わなかったか!?
「・・・　うますぎる！」
あんたはどこの伝説の傭兵ですか・・・。
まあ、口に合ったようでよかった。
「そうか、それよかった」
だけど、明日木曾の服を買いに行くついでに食材も買ってくるか。

さっき確認したら、冷蔵庫の中が少し寂しかったし・・・。
さて、俺も食べるか。
その後、俺は食べ終わった食器を片づけ、木曾に電化製品の使い方を教えていた。
「なかなか簡単だな」
「そうか?」
木曾は簡単に使い方を覚えて行った。
これで明日には大体使いこなせるようになるな。
そうだ、後でパソコンの中の画像も隠さなくちゃな、パソコンの中に入っている方がさっき隠した『アレ』より、量も質も段違いだからな。
「ふぁ〜」
木曾が大きなあくびをする。
俺も眠くなってきたし、そろそろ寝ようか。
確か押し入れに木曾の分の布団もあったはず・・・。
「よっと」
「どうした?」
俺が立ち上がると木曾に声をかけられる。
「いや、布団を押し入れから出そうかと思ってな」

「俺にやらせてくれ、これから世話になるんだ。それぐらいことはやるさ」
そうか、それなら少し甘えさせてもらうか・・・。
・・・・・・。
ちょっと待て、そういえば俺『アレ』が入ったダンボール・・・　押し入れに入れたよな・・・。
「木曾やっぱり俺が「なんだこのダンボール?」・・・」
・・・　まだだ、まだダンボールの中身が見つかったわけじゃない。
外見だけならただのダンボールだ、ここで下手に焦るとかえって怪しまれる。
冷静に、冷静に対処すれば・・・。
「木曾、ちょっと貸せ」
「ああ、わかった」
そう言って俺はダンボールを木曾から受け取る。
だがここで安心してはいけない、たぶん木曾はこのダンボールがなんだか聞くだろう。
「そのダンボール中身に何が入っているんだ?」
予想通り聞いてきたか・・・。
ここは即興で思いついた言い訳を言うべきだろう。

ウソはあまり付きたくないが、これはしょうがないだろう。
これで中身を見られましたなんて言ったら死ぬ。
「その中には、昔読んだ本が入っている。今はもう読まなくなったからダンボールに入れて置いておいたんだ」
よし、一回も噛まずにしかも顔を変えずに言い切ることが出来た。
これで納得してくれるだろう。
「そうか（昔読んだって割には、押し入れの戸をあけて目の前に入っていたが・・・。まあ、誰にでも　秘密はあるか）」
「ダンボールはこのまま俺が持っているから、木曾は布団を取ってくれ」
後は、木曾が布団を取ったら、このダンボールを押し入れの奥に入れればいい。
「わかった。よっと」
木曾が押入れから布団を取り出す。
手伝ってやりたいが、今ここでダンボールを手放すわけにはいかない。
「引き終わったぞ」
あとはダンボールを入れればいいだけだ・・・。
「ありがとな」
俺は木曽にお礼を言うとダンボールを押し入れの奥に入れる。

最悪の状況は避けられた。
これでようやく眠ることができる。
「木曾、そろそろ寝ようか」
「そうだな。俺も眠くなってきたしな」
俺は部屋の電気を消し布団に入る。
「おやすみ」
「ああ、おやすみ」
今日は、本当に忙しい一日だった。
これからどうなるかはわからないが、今年の夏は楽しくなりそうだ。

買い物　前編

買い物　前編

「宗太、起きろ朝だ」
「もう朝か」
眠い、だけど今日は木曽の服を買いに行かなければいけないばならない。
だけど、その前に朝飯か。
「木曾、ちょっと待ていてくれ。今朝飯を作る」
今日の朝は何を作ろうか？
フレンチトーストでも作ろうか。
「朝飯は俺が作っといたぞ」
え？
木曾が俺のために？
てか、その前に・・・。
「木曾って料理できたんだ・・・」

「ああ、姉さんたちに料理は任されていたからな」
まあ、確かにあの人たちが料理ができる気はしないけど、
木曾も料理が出来たとは驚きだ。
「冷めないうちに食べてくれ」
テーブルの上には、おいしそうなフレンチとーストが置いてある。
匂いが食欲をそそる。
「じゃあ・・・」
「「いただきます」」
二人であいさつをして俺は、フレンチトーストを食べる。
「どうだ？美味いか？」
口に入れた瞬間に優しい風味が広がる。
・・・　凄い美味い。
「美味い、どうやったらこんなおいしくできるんだ」
はっきり言って、木曾の作ったフレンチトーストは俺の作るのより遥かにうまい。
これから料理は木曽に任せようかな・・・。
「木曾、これから料理をやってもらっていいかな？」
「いいぞ」

これで、毎日木曾の料理を食べれる。
木曾と出会う前の俺が、この状況を見たら嫉妬するだろうな。
さて、そろそろ買い物に行きますか。
まあ、その前に準備さなくちゃいけないんだが。
まずは財布だな。
たしか、この戸棚に・・・　あった。
次は、スマホか。
テーブルの上に置いてあったスマホをポケットに突っ込む。ついでにその隣に置いてあった車のかぎも一緒に突っ込む。
「木曾そろそろ行くからついて来てくれ」
「わかった。少し待ってくれ」
そう言いながら、木曾は帽子をかぶる。
そう言えば木曾は、改二になっても帽子をかぶってたな。
なんでだ？
「なんで帽子をかぶるんだ？」
「いや、これがないとどうも落ち着かないんだ」
特に理由はないのか。

まあ、逆になんか理由があっても対応に困るが・・・。
「とにかく車に乗ってくれ」
そう言って俺は木曽を車の助手席に乗せ、
俺は運転席に乗る。
「ずいぶんと新しい車だな・・・」
木曾は車に乗るなり、周りを見渡す。
まあ、俺が大学に入ったそのお祝いとして買ってもらったものだからな。
「ちゃんとシートベルトを締めてくれよ」
「ああ、わかってる」
もし、捕まったりしたらいろいろめんどくさいからな。
「できたぞ」
さて、木曾もシートベルトを締めたし、
行くとしますか。
「シートベルトも締めたようだし、車出すぞ」
「わかった」
木曾の返事は素気なかったが、しっかりと返事をしてくれた。
「どうだ、外の景色は?」

俺は、外を見ている木曾に話しかける。
「住宅が多いし、人もたくさんいる。俺の世界も平和になればこんな感じになるのか…」
ちょっと質問を間違ったかもしんない。
… どうしようこの空気。
「空気悪くしちまったな。すまない」
「いや、木曾は悪くないよ」
実際変な質問をした俺の方にも非がある。
木曾一人が悪いわけじゃない。
「俺を気遣ってくれたのか… ありがとう」
そういって木曾は笑顔を見せる。
なんか… かわいいな… っていったい俺は何を考えているんだ！
一回落ち着こう……。
……。
だいぶ良くなってきた。
だけど、俺はあの先輩のおかげでだいぶ度胸がついたが、
まだこういうのには慣れてないな…。

「宗太、まだつかないのか？」
俺がそんなことを考えるうちに、
いつの間にか近いところまで来ていたらしい。
「もうちょっとで着くよ」
そんな返答をしている間にスーパーが見えてきた。
「木曾、あれがスーパーだ」
「へえ、あれが・・・」
俺は木曽が外を見ている間に、
スーパーの駐車場に入り、車を止める。
「さあ、着いたぞ」
俺がそういうと木曾が車のドアを開け、外に出る。
そんなに、早くいきたいのか・・・。
俺も木曾に続いて車の外に出る。
「さて、行くとしますかね」
財布とかは持った。
忘れてる物とかはないな。
「ああ」

そうして俺たちはスーパーの中に入っていった。
「ずいぶんとでかいな」
「まあ、ここら辺で一番大きいスーパーだしな。ここに来れば大体の物が揃うぞ」
此処のスーパーはよく特売とか安売りするから財布に優しいんだよな。
そのおかげで自分の趣味とかにお金を回せる。
そんな俺の話は置いといてまずは、木曾の服かな？
確か、二階に安く買えるとこがあったはずだから・・・。
「木曾、二階に行くぞ」
「そういえば、金とかは大丈夫なのか？」
それに関しては親からの仕送りも来ているし、最悪あの人を頼ればいい。
・・・ あの人に頼るのは、ほんとにヤバくなった時だけだ。
まあ、あの人は俺が呼んでいなくても勝手に来るんだけどな・・・。
「それに関して問題ない」
木曾と話をしながら歩いていたら、いつの間にか服屋の前に来ていた。
俺は木曽と一緒に店に入る。
「木曾、ここで服を選んでくれ。値段とか気にするなよ」
金は結構余ってるから多少は使っても構わない。

…　というのは建前で、本当は木曽にかわいい服を着てもらいたいんだ。
まあ、そんなキザなセリフは言えないが。
そういえば、球磨型でスカートを穿いてるのって木曾とハイパーズだけだよな。
「分かった。じゃあ、好きなように選ばせてもらう」
そう言って木曾は、近くに合った服を見て行く。
今思ったけど、これ他から見たらこ…　いや、変なことは考えないようにしよう。
これ以上考えたら、木曾と顔を合わせられなくなりそうだ。
「宗太、選び終わったから会計を頼む」
木曾の手には、服が数枚握られている。
さて、会計に行ってみようか…　いったいどれくらいの値段なのかは今ここで見るのも面倒だし
見なくてもいいか、結局レジでわかるしな。
「よし、じゃあ会計をするか」
俺は、木曾と一緒にレジに並ぶ。
財布のなかにはだいたい5万ちょっと入っている。
これだけあれば余裕で足りるよな？
なんかちょっと不安になってきた。

「２５６８０円になります」
案外服って高いな。
まあ、なんとか金額に収まり切ったからよかったけど。
だけど、やっぱり学生には痛い出費だよな。
「次はどこに行くんだ？」
次は下着売り場かな。
だけど、こればっかりは木曽一人で行ってもらわなければならない。
あそこは男が入ってはいけないオーラのようなものが出ている。
「ついてくればわかる」
確か下着売り場はこの近くだったはず……　あった。
案外近いところに会ったな。
さて、俺は木曽に財布をわたして……。
「さあ、宗太行くぞ」
俺が木曾に財布を渡そうとすると、不意に木曾に腕を掴まれる。
あれ？
さっきの言葉とこの行動嫌な予感しかしないんだけど。
「木曾、なんで腕をつかんでるんだ？」

「宗太も行くからだが？」
はあ!?
なんで俺が下着売り場に入んなくちゃいけないんだ！
男子が女性の下着売り場に入るとか公開処刑でしかないから！
「いいだろ、俺とお前の仲じゃないか！」
「いやいやいやいや」
俺とお前の仲と言われても、俺たち会ってそんな経ってないからね！
そう思ってくれてることは純粋にうれしいけどさ！
「さあ、行くぞ」
「……　わかった」
覚悟を決めるか。
もうこうなったら行ってやる。

買い物　後編

買い物　後編

「はあ…」
結局、俺は木曽と一緒に下着売り場に行った。
なんか、もう疲れた。
「どうした?溜息なんてついて」
主にあなたのせいです。
まあ、きっぱりと断れなかった俺が悪いような気がするが…。
だけど、木曾の買った下着があんなに…　いや、木曾の威厳のためにも
変なことは言わないことにしよう。
けど、これで木曾の服をそろえることが出来た。
後は…。
「今日の昼と夜の料理の材料だが…」
料理に関しては木曽に任せることにしたので、

俺の出る幕はせいぜい会計位だ。
「俺に任せろ！」
ずいぶんと自信満々だな。
まあ、朝のフレンチトーストを考えるとその自身も納得できるんだが。
「期待してるよ」
さて、木曾はいったい何を買うんだ？
買うものによっては、今日何を作るかが分かるんだが・・・。

数十分後

「宗太、そろそろレジに向かうぞ」
「わかった」
そう言って俺は木曽と一緒にレジに並ぶ。
さて、いったい今日の昼ごはんは何ができるのか・・・。
今から楽しみだ！
俺はそんなことを思いながら会計をした。
それと、たぶん今日の昼は何を作るのか分かった気がする。

「宗太アレなんだ？」
木曾がそう言って指をさした場所には、アイスクリームの店があった。
そうだ！
「木曾、少し待っていてくれ」
俺は木曽にそう言うと、アイスクリーム屋に向かって走る。
種類はオーソドックスなバニラでいいよな。
「バニラ二つください」
「バニラ二つで２６０円だよ」
俺は財布からお金を出し、店員に渡す。
「はい、まいど」
そして、木曾のいる方に駆け足で戻る。
喜んでくれるといいが・・・。
「木曾、はい」
片手に持っていたアイスを木曾に渡す。
「えっ、いいのか？」
「ああ、今日のお礼だ」
少し不安なのは木曾の口合うかだな。

前に、木曾のクリスマス限定のボイスで甘すぎるって言ってるんだよな。
俺としては、甘すぎるとか言って幸せそうに食べる木曾の姿が見えたんだが、
実際はどうか・・・。
「なら、いただくぜ」
そう言って木曾は、アイスを食べる。
・・・どうだ。
「たまにはこういうのもありかもな」
良かった、どうやら口に合ったらしい。
ふう、一安心だな。
「宗太、どうしたそんな安心した顔をして」
「木曾は甘いのが好きでよかったって思ったんだよ」
「いや、甘すぎるのはあまり好きじゃないな。だけど、そのおかげで
菓子作りが出来るんようになったんだよな」
は!?
いま、菓子って言った!?
「木曾、まさかお菓子も作れるのか!?」
「ああ、そんな凝ったものは作れないが簡単なものなら作れるぞ」

料理や服、さらに今回のお菓子作りといい、案外木曾って女子力高いのか。
…　今度お菓子も作ってもらおう。
「木曾、今日の買い物はどうだった？」
俺たちは、さっき買い物を終えて車に乗って帰る最中だ。
今回の買物を、木曾は楽しんでくれたかな？
「結構楽しめたぞ」
「そうか、それはよかった」
だけど、まだ半日しか経っていないのに疲れた。
まあ、楽しいからいいかな。
「そういえば宗太、買い物のとき言っていた頼れる人ってどんな奴なんだ？」
…　どう説明すればいいんだろう。
一言で言ってしまうと、世界有数の金持ちだが…。
性格がアレなんだよな…。
「まあ、たぶんそのうち合うと思うから説明はその時だ…」
出来れば会いたくない。
あの人に、木曾と暮らしてるなんてばれたら絶対に部活のやつらに言い張らされる。
そんなことになったら、木曾の説明をしなくちゃならないからな。

「宗太がそう言うならいいか」
さて、木曾とそんな話をしているうちに家に着いたらしい。
そういえば、今日の昼飯はいったいなんだろう？
木曾に聞いてみようかな。
「木曾、今日の昼って何を作るんだ？」
「昼はうどんで、夜はカレーにするつもりだ」
昼はうどんで、夜はカレーか。
俺としてはカレーが結構楽しみだな。
甘口になるのか、それとも辛口になるのか。
そういえば、艦隊これくしょんでカレーを作ってる艦娘って多いよな。
その中でも、一番気になるのは『比叡』のカレーだ。
比叡の時報の中で提督が逃げ出していたが、
実際はどうなんだろう？
「木曾、比叡のカレーて食べたことある？」
二次創作では、いろいろひどいことになってるが実際はそんなひどくないだろう。
…ないよね？
なんか自信がなくなってきたな…。

「比叡のカレーか、懐かしいな」
食べたことあるんだ。
で、問題はその味だな。
「味はどうだったんだ」
「はっきり言ってしまうと… まずかった」
やっぱり、比叡のカレーはまずかったか。
「まずくなった理由として比叡は隠し味を入れていた。考え方はおかしくない。
だが、聞きかじっただけの知識では美味い物は作れない。そもそも、比叡はカレーの隠し味にコーヒーとチョコレートとケチャップと醤油、ヨーグルト全てを入れていたからな。比叡は隠し味さえなかったら普通に美味いんだが…」
「そ、そうか」
なんか途中から、木曾に力が入って話しかけることが出来なかった。
木曾って何気に料理に詳しいな。
なんていうんだろう… ギャップ萌え?
まあとにかく、比叡の料理も隠し味がなければ普通ってことも分かったし良しとするか。
「じゃあ、これからうどんを作るから少し待っててくれ」

「わかった。楽しみにして待ってる」

さて、俺は木曽の作ってくれるうどんを待つことにしますか。